



なみき・ゆうた / 1977年生まれ。慶應義塾大学卒業。フィールドマネージメント社長。マッキンゼー・アンド・カンパニーを経て、2009年から現職

並木さんの
情報取捨選択の習慣

- 朝
テレビの内容がなんとなく耳に入ってくる程度
積極的な情報収集はしない
- 通勤中
「考える」時間
スマホは見ない
- 仕事
午前 社内で会議やデスクワーク
午後 クライアントを訪問
仕事のルールを決め効率化
- 夕方
映画やお茶など息抜きを大事にする
仕事のことを「考えない」時間を持つ
- 帰宅後
メール対応など翌朝の通勤時間を「考える」
時間に充てるため、仕事は夜のうちに済ませる

情報取捨選択3大ツール

- ノート
打ち合わせなどのメモはすべて1冊のノートにまとめる
- iPhoneのニューススタンド
インプットは極力減らしたいので、ニューススタンドに登録されている雑誌の見出しのみをざらりとチェック
- 車などの移動機関
移動中は「考える」時間とし、外からの情報をインプットはしない

情報断捨離のモットー

- ①Focus...1人で考える時間をもつ
- ②Filter...データではなくインサイト(分析)情報に触れる
- ③Forget...何も考えない時間をもつ

「情報だけはバツサリ捨てられ」と話す。6年前に立ち上げたコンサル会社、フィールドマネージメントでは、エイベックスグループなど多くのビッグクライアントを持つ。対象とする業界は音楽からスポーツ、航空と幅広い。コンサルテイングをするうえで膨大な情報が飛び交

うが、のみこまれて判断が鈍ることはない。三つの習慣が染みついていくからだ。

スマホを見ず考える

毎朝9時に家を出て、オフィスに向かう。通勤は車か電車が、電車に乗っているときもスマホは見ない。その時々で「テーマ」を設定し、ただ考える。新聞を読むなど、朝をインプットタイムに使う人は多いが、

「ひとり集中して考えるアローン(A-Long)タイムに使う」外からの情報はシャットアウトして、考えることに集中することで、質の高い「解」が生まれるという。

考えている過程も、情報にのまれない工夫をする。例えば「日本の高齢化率は26・0%」だと単なる情報だが、「高齢者の見守りサービスが増えるのでは」と展開させると「分析」になる。情報過多に陥らない。

日中は会議やクライアント訪問に充てるが、夕方には一度休憩を入れる。映画を見に行ったり、友だちとお茶したり。仕事と距離を置く時間をつくることで、「何ががひらめく」「アイデアが降りてくる」こともあると

移動中に降りてきた

並木さんは現在、JリーグのJ1に所属する湘南ベルマーレの経営に参画する。昨年の売り上げは11億円強。同じJ1には30億円以上稼ぐチームが多数あり、抜本的な改革を必要としていた。

Jクラブの売り上げは主に、スポンサー収入、チケット収入、ファンクラブの年会費やグッズ販売の三本柱だ。チケット収入はスタジアムの収容人数の関係で上限があるし、ファンクラブの会員数やグッズ販売も飛躍的には伸びない。並木さんはこれから三つの収入源を並行して追いかけるのではなく、二つは外注

「私たちの仕事は多くの情報を扱いますが、大切なのは、それを知っていることより、分析をして改善策を考えることです。情報を収集することだけに時間を浪費するのではなく、集中して考える時間をとることが必要です」

並木さんは言う。

永谷さんの
情報取捨選択の習慣

- 通勤や移動中
LINE NEWSやSmartNewsなどのニュースアプリをチェック
- 日中
会議室での会議のほかに、いつでもどこでも会議
FaceTimeなどのビデオチャットツールで
- 帰宅してからも
FaceTimeなどで打ち合わせすることも多々
- 休日
ジョギングや遠出をすることで、頭をリセット
- オンオフ関係なく
情報交換
気の置けない友人とは夕食など、できるだけ会う約束をする



ながや・あやこ / 1972年、愛知県生まれ。立教大学卒業後、リクルートなどを経て、東京ガールズスクレクションのチーフプロデューサーに。よしもとクリエイティブ・エージェンシーでは、イベント・メディア事業を担当

情報取捨選択3大ツール

- ニュースアプリ
LINE NEWSやSmartNews、新聞社系では毎日新聞ニュース
- Facebookとキュレーションサイト
Facebookで知人がキュレーションサイトから拾ったニュースを投稿している。「キュレーションサイトのさらなるキュレーションです」

情報断捨離のモットー

常に「何のためにやるのか」という目的を意識する

「知見を持つ人に会う。それに勝るものはありません」。頭の中には、カテゴリーごと「この人!」というリストが入っている

のは、あとから見返した時に一目瞭然だから。企画ごとのファイルにまとめておけば、アップデートもしやすい。

判断しやすいよう変容

会議が終われば、すぐにメモした内容について、実行部隊のスタッフとスマホで「会議」だ。移動中の新幹線の車内も、自宅も、通りすがりの公園のベンチも、一瞬で会議の場となる。

「Face Timeとかハングアウトとかビデオチャットツールを使えば、いつでもどこでも、複数の人数で会議できる」

ビデオチャットで話す間も手はせわしなく動く。内容を簡潔書きにしたり、イメージ図を描いたり。それをその場で「キャッシュ」と撮影。「じゃ、これから送るから」と即座に会議に参加したスタッフに送信する。遠隔地を結ぶ会議でもメンバー全員で認識を共有しておけば、多数のスタッフが効率よく動ける

からだ。重要なのは一連の作業を、スピード感を持って進めること。それがいくつものプロジェクトを同時進行させる秘訣だ。集まってくる様々な情報に対し、常に判断し、捨てる情報、拾う情報を仕分ける。その時のポイントがシンプルだ。

「何のためにやるのかを常に意識することです」

水都大阪プロジェクトの場合、PRが至上命題。国内はもとより世界の人に、新たな大阪ファンを創出できるかどうか、が全ての判断基準だ。

「あれもこれも、という積み上げ式ではなく、ユーザーやメディアに伝えたいこと、響くものだけを残していく。それが決まれば、目指すべき最大のアウトプットに向けて、やることを精

集中、分析、一旦離れる
アロウンタイムが重要

並木裕太さん [38]

経営コンサルタント

捨てることは苦手、と言う。新入社員の面接では、応募者全員が「いい人」に思えて落とせない。先日も知人からオンラインゲームに誘われ、付き合ったらハマってしまった。人付き合い

合いではなかなか「捨てられない」のだ。

名門コンサルテイング会社マッキンゼー・アンド・カンパニー日本支社で、最年少で役員を務めた並木裕太さん(38)のこと